

縁側に、日記を置き忘れた。

そう気付いたのは、目を覚ましてからだった。

急いで取りに行くと日記は庭にいる庭師の手の中だ。

慌てて駆け寄り、自分でも何を言っているのか分からないような奇声を上げて彼から日記を奪おうとした。

でも私の手の届かない高さまで持ち上げられてしまう。

「返して！ まさか中見てませんよね！？」

「見た」

「……、うあ、…………お、おわった」

あまりの絶望に体の力が抜けた。

膝が崩れそうになったそのとき、後ろからもう一人の庭師が私を抱き止めた。

日記を手をしている庭師より若い彼が私を覗き込む。

「……で、お姉さんの日記の通りにやってみましょうか。
オレたちはいいですよ？」

日記を持ったままの庭師も言った。

「今夜、俺たち帰らずにここにいるから。逃げるなよ」

そのときは何も反応できなかったけれど。

夜。二人は本当にそこにいた。

形容しがたい表情で庭に現れた私を、にやりと笑った二人は縁側まで引きずって。

私に覆い被さってきた。

——田舎の古民家に泊まって、三日目。

旅行サイトで見つけたこの古民家は一棟貸しの宿だ。
チェックインは管理人に鍵をもらうだけ。そのあとはこの家は私一人になる。

最寄りのコンビニまで歩いても三十分以上もかかるらしいから、この辺りは車のない私には気軽に歩ける場所ではない。

でもそれがちょうどよかった。

自分をそういう状況に置くためにここに来たのだから。

失恋して、その落ち込みが仕事にまで影響が出てしまい、まずいと思って衝動的にここを予約した。

私はここで休むんだ。何も考えずに。

庭師が来ることは、チェックインをするときに聞かされていた。

「この時期は庭の手入れがあって、平日は朝から二人ほど庭に入ります。家の中には入りませんので気になさらず」

この家の持ち主である初老の女性にそう言われた翌朝、縁側でコーヒーを飲んでいたらその二人が入ってきた。

「お邪魔します」

四十代くらいの男性と、その後ろに二十代くらいの男性。

庭師か。

二人は作業着を着ていて、道具が入った袋を腰からぶら下げていた。

つばの広い帽子をかぶっていて顔はよく見えないけれど、捲り上げた袖から見える日焼けした腕は、かなりたくましそう。

手も節くれだった、大きな手だ。

私は「おはようございます」とだけ答えて、それ以上は見ないようにした。

向こうも仕事で来ているだけだ。じろじろ見られては気まずいだろう。

——ただ、失恋したばかりで人肌の恋しい私に、彼らのそのたくましい体は毒だった。

学生の頃からの私の癖。

自分の思考を文字にすると安心する、という理由で書き続けている日記。

そこに彼らのことを書いてしまった。

失恋して殴り書きしたページのすぐあとに、だ。

女一人で泊まっているこの家に男性二人が来たこと。

体に馴染んだ作業服、そこから覗く腕にときめくこと。骨ばった大きな手、……に、妙に色気を感じてしまった

こと。

それから、性欲に正直に。

落ち込んでいる自分を二人がかりでめちゃくちゃにされて、何もかも忘れさせてもらったら気持ちいいだろうな、と。

そして昨夜、私はその日記を縁側に置き忘れたのだ。

「——うわ、あ、ちょっと」

二人に縁側の床板に押し倒された。

驚いてバタつかせる私の手足はすぐに押さえつけられる。

暗い田舎に灯りは星しかない。

薄暗い中、至近距離にいる二人の顔だけがはっきりと見える。

「オレたち期待されちゃってますよ、天城（あまぎ）さん！」

「そうだな、太一（たいち）、俺たちで願望を叶えてや

ろう」

ガッチリとした年上の庭師が天城さん、細身ながら引き締まった体つきの年下のほうが太一さん、と言うらしい。

「あの、違います、あれはただの願望で……」

「あんたのその願望を現実にしてやるって言ってんだよ」

「ひ、」

二人は私の首すじに顔を埋め、

ちゅ、

小さく音を立ててキスをし始めた。

ちゅ、

ちゅ、ちゅ♡

ちゅ♡

二つの唇が首を細かく吸い、顎を伝って唇まで登ってきた。

会って数日の他人との距離じゃない、一日働いた人間

の匂いがして落ち着かない。

ちゅ、ちゅ♡

ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡

唇の端に天城さんの唇が当たって思わず口を強く結ぶと、天城さんは私の顎を掴んだ。

無骨な手。

力が入り、私の唇を開かせようとしてくる。

「む、ぐ、……、」

「口開ける」

「あれ、お姉さん抵抗してるんですか？ そっか、日記読んだ感じ、無理やりされたいっぽかったですもんね♡
そういうプレイだ♡」

二人はどこまで日記を読んだんだろう。

二人について書いた部分、本当に全部読まれてしまったのかもしれない。

ふいに天城さんが鼻を摘んできて、息のできない私は観念して口を開いてしまった。

ちゅ、ぷ♡

重なる唇、入ってくる舌。

ちゅ♡ れる♡

厚い舌が口の中で動く。

「……っ、ん、あ」

ぞわ……♡

舌の感触に肌が粟立ってしまう。

それが熱に変わるまでにそんなに時間はかからなかった。

ちゅ♡

天城さんの手は私の顎を掴んだまま♡

ちゅぷ♡ れる♡

舌だけが口の中で蠢いた♡

ちゅ、ぷ♡ れる、れる、れる♡♡

舌先でつついて、腹で擦り合わせて♡♡

……べろお♡♡

舌の感触を思い知らすように舐め上げる♡♡

「…あ♡ ん♡ ン♡♡ やめ……、だめです、こんな」

天城さんの舌に翻弄されている間も、太一さんは私の

首や頬、こめかみを啄み続けていた♡

「大丈夫ですよ～♡ オレたちが失恋なんて忘れさせてあげますから♡♡」

しかも軽やかにそう言い私のTシャツを捲り上げ、背中のブラジャーのホックを外そうとしていて♡

「待ってください、私本当にそんなつもりは…！」

これ以上はまずいと、まずは天城さんを押し退けようとしたけれどびくともしない♡

もがいているうちにホックは外され、太一さんはTシャツと一緒にブラジャーもたくし上げてしまった♡

素肌を冷えた風が撫でる♡

「かわいい乳首♡ いーっぱい気持ちよくなりましょうね♡」

れ…♡

太一さんの舌が乳首を覆った♡

まだ主張もしていないそこを生温かい舌が隙間なく覆い、

ずり♡

ずり…♡

「…ッ♡ あ♡」

ゆっくり舌を上下させると、

むくぅ……♡♡

その下で芯を持ち始めてしまった♡♡

「や、あ♡ あッ♡」

ずり♡

ずり♡

起き上がる乳首が舌を押し上げているのが自分でも分かる♡

ずり♡ ずり♡

ずり…♡

舌はそれを慰めるように腹で先端を擦るから♡

ずり♡ずり♡ずり♡ずり♡

ゆるく勃起した乳首からじわじわと気持ちいい感覚が広がっていく♡

「や、あー……♡♡」

私はむず痒い刺激にまた天城さんの肩を押し返そうとした♡

今度は嗜めるようにその私の両手を掴んだ天城さんは♡

「そんな抵抗じゃびくともしないぞ、嫌がるならちゃん

と力入れる♡」

更に私に体重をかけ、私の舌を音を立てて吸ってくる♡

ちゅ♡ れろ♡ れろお♡♡

べろ、べろ、べろお♡♡

ずり♡ ずり♡ ずり♡ ずり♡ ずり♡

唇も舌も天城さんに舐められ吸われ♡

乳首を勃起させるように太一さんに擦られて♡

「……ッ♡ んあ♡ あ♡♡ あ♡ ん♡ だめ♡ だめ、……♡」

抵抗しないといけないはずなのに、体内に広がる疼きに私は体をもじもじと動かしてしまっていた♡

「ほらあ、ちゃんと抵抗しないと下も脱がせちゃいますよー♡」

太一さんが乳首に舌を這わせたまま、私のスウェットパンツに手をかけた♡

下着ごとウエストに指がかけられ、ずり下がっていく♡♡

今度は下半身を風に撫でられた♡

「だめ、やだぁ……♡ さわんないで♡」

「もう遅いですよ、こんな弱い抵抗で逃げられるわけないでしょう♡ それにオレはお姉さんのここに興味があるな～♡♡」

太一さんの指は♡

とん♡♡

いきなり私のクリトリスをタップした♡♡

ビクッと体が揺れて顎が上がる♡

「……ッッ♡♡」

「お、クリ弱いか？」

「そうですねえ、あんな日記書きちゃうくらいなんだからオナニーいっぱいしてるんだろうなあ♡♡ ほらもっととんとん♡しますよー♡♡」

とん♡ とん♡ とん♡

「あ♡ あ♡ あ♡」

太一さんの指の腹が包皮の上からクリトリスを叩く♡

とん♡ とん♡ とん♡

「ん♡♡ あ、んッ♡ は、あ♡」

一気にクリトリスに熱が集中して♡
じわじわと体に染み渡っていく♡♡♡
とん♡ とん♡ とん♡
「んッ、ううう……♡♡」

その指からも逃げようと体を振った♡ けれど♡

ぢゅ……ッ♡♡

天城さんの唇に密着したままの唇を吸い上げられ♡♡
べろおっ♡♡

太一さんの舌に敏感になった乳首を舐め上げられ♡♡
こすこすっ♡♡

タップしていたクリトリスは今度は摩擦された♡♡

二人の愛撫の圧が強くなった♡♡♡

「……あっっ♡♡」

察してしまった♡♡

二人はこのまま私をイかせようとしている♡♡♡

ぢゅ、っ♡♡ ぢゅる♡♡ ぢゅ、ぢゅッ、ぢゅッ♡
♡♡
べろべろべろっ♡♡ れるるるるっ♡♡♡ れろん、

れろん、れろん♡♡ べるるッ♡♡♡

こすこすこすっ♡♡♡ こすこすこすこすっ♡♡♡
こすこすこすっ♡♡♡

「ッ、んむ……！♡♡ な、あ、やめ、！♡♡ あんっ、
んああ！♡♡♡」

一気に大きくなった快感に体が勝手に暴れてしまう♡
それでも天城さんの体も太一さんの体も跳ね返すこと
ができない♡♡♡

ぢゅッ♡ ぢゅる、ぢゅっ♡♡ ぢゅッ♡ぢゅッ♡
なす術なく二人に覆われ♡
べろお♡ べろっべろっ♡ れろれる♡♡ れろおれ
ろおれろお♡♡

舌と乳首とクリトリスはされるがまま♡♡♡
こすこす、こすこすっ♡♡ こすこすこすこす、こす
っ♡♡
突起が全て勃起して、ますます神経が研ぎ澄まされて
いく♡♡

ぢゅっぷ♡♡ ぢゅ、ぢゅ♡♡ ぢゅぷ♡♡ ぢゅば、
ぢゅぱっ♡♡♡
レロレロレロお♡♡ べるっ♡♡べるっ♡♡べるっ♡

♡ チ口チ口チ口……♡♡♡ ……ぢゅッッ♡♡♡

こすこすこすっ♡♡ こすこすこすっ♡♡ こすこす
こすっ♡♡

静かな庭に、水音と私の声が響いた♡♡♡

「あッ♡ んうッ！♡♡ ん——ッ！！♡♡♡♡♡」

「……はは、舌しっかり突き出せ、イク瞬間思いっきり
吸ってやるからな♡」

「ていうか触ったばっかなのにクリももうこりっこりな
んですよね♡ これもうイけるでしょ♡♡♡ ほらあ♡
イけ♡ イけ♡」

頭の中、気持ちいいことで埋まっていく♡♡

私は言われるがままに舌を突き出した♡♡♡

ぢゅ……ッッ！♡♡♡

それが合図かのように思いっきり吸い上げられて♡♡

「……………っっ！！♡♡♡♡♡」

そのまま、イってしまった♡♡

一瞬頭がクラッと揺れて、体の力が抜けた♡♡

天城さんの唇がやっと離れて月の灯りが眩しく感じる♡♡

「は、あ……♡♡♡」

大きく息を吸って、吐いて♡

なんとか頭を整理しようとしていたから、天城さんが下半身まで下りていったのに気付かなかった♡

太ももを内側から広げられ驚いて視線をそちらへ向けると♡

ぶぢゅッッッ♡♡♡

ぢゅるるるるる……っ♡♡♡♡

「あ……ッッッ♡♡♡」

天城さんが私の下半身に顔を埋めている♡♡ ……と
うか、吸われてる♡♡ クリトリスを♡♡♡♡

ぢゅるッ♡♡ ぢゅるッ！♡♡ ぢゅ…、ぢゅッ♡♡

「あ♡♡ あ♡ だめ、」

「…はは、いい弾力だ♡♡」

ぢゅ…ッ！♡ ぢゅぶ♡♡ ぢゅ、ぢゅ、ぢゅぶッ♡
♡ ぢゅぶるるるッ♡♡

「イったばっか、なのにい♡♡ あッ、あ——……っっ♡♡」

「口の中でまた硬くなってるぞ♡ ……ん♡ちんぽみたいに勃起してきてる♡♡」

ぢゅるるッ♡♡ ぢゅるるるッ♡♡♡ ぢゅるるッ♡♡♡

「だ、め……え、きつい♡♡ クリ、敏感なってて、……！！♡♡♡」

「そうだな♡♡ クリ根っこ、俺の口の中でヒクついて……♡♡」

ぢゅるるッ♡♡ ぢゅぶ、ぢゅっ、ぢゅっ、ぢゅ……♡♡♡

ぢゅ〜〜〜〜ッ♡♡♡♡

天城さんは本当にフェラチオするみたいにクリトリスを丸ごと口に含み、吸い上げている♡♡

唾液を含んだその吸い上げは、イったばかりのクリトリスには刺激が強くて♡♡♡

頭を振ってやり過ぎしていると♡♡

「乳首もフェラしてあげますよ♡♡ ……確か、オレらに体押さえ込まれて、逃げられない状態で無理やりにイカされたいんでしたっけ？♡」

上半身にまた太一さんがのしかかった♡♡
太一さんの唇は乳首まで下りて♡♡♡ そっちも♡♡

ちゅく、ちゅくちゅく……ッ！♡♡

窄めた唇で細かく吸われる♡♡♡♡

「んううううっ！！♡♡♡♡♡」
「萎えてたのに一発でビンビンだ♡♡ フル勃起してクリと一緒に気持ちよくなりましょうね♡♡♡」

ちゅくっ♡♡ ちゅくっ♡♡ ちゅくっ♡♡
ちゅくちゅくちゅくッ♡♡♡ ちゅくッ、ちゅくッ♡
♡

……確かに、太一さんの言う通りのことを日記に書いた♡

そして日記の内容の通りに、私はほぼ外とも言えるこの縁側で、二人の体重を感じながら乳首とクリトリスを

気持ちよくされている♡♡

ぢゅううッ♡♡♡ ぢゅっ、ぢゅぶ♡♡ ぢゅっ♡♡ ぢゅっ♡♡

包皮ごとクリトリスを吸われ♡♡

ちゅくッ♡ ちゅくちゅくッ♡♡ ちゅくちゅくちゅくッ♡♡

勃起させられ敏感になった乳首をしゃぶられている♡♡

「あッ♡ あ♡♡ んあッあ♡♡ あああ、…っ！♡♡♡」

抵抗も忘れた手足がピンと突っ張り始めた♡♡♡

手も足も握り込み、そうすると敏感なところが余計に敏感になって♡♡

もっと気持ちよくなってしまふ♡♡♡♡

ぢゅッ♡ ぢゅッ♡ ぢゅッぢゅッぢゅッ♡ ぢゅるるるっ♡♡

「あッ♡♡ ッあ♡♡ あ、だ、め……、」

ちゅくちゅくッ♡♡ れろん♡ ちゅくちゅくちゅくッ♡♡ れろお…♡♡♡

「だめえ……♡♡♡ またイっちゃ、……う、あ♡♡」

背中が浮き、腰が浮き、私は息を止めた♡♡♡

何も言わず私を責め続ける二人に、またイかせようとしているのを察してしまって♡♡♡

ぢゅッ♡♡ぢゅッ♡♡ ぢゅぢゅぢゅぢゅぢゅぢゅぢゅッッ！♡♡♡

レロレロレロレロレロッッ！♡♡ ちゅく…！♡♡
ちゅくちゅくちゅくちゅくっ！！♡♡♡

「……あ♡♡♡ あッ、あ♡♡♡ イ、きます♡♡ これ、イクッ！♡♡♡ ……ッッ、……ンンッッッ！！♡♡♡♡♡♡♡」

浮いていた腰が絶頂に一際大きく跳ねた♡♡
けれど、二人は止まらなかった♡♡♡

カリ…っ♡♡♡

太ーさんは乳首を吸い続けながら、もう片方の乳首に爪を立て♡♡♡

ぐ、ちゅ♡♡ ぐちゅう……♡♡♡

天城さんはクリトリスを口に含んだまま、その下、おまんこの入り口に指を二本、差し込んできた♡♡♡

「ひあ……！♡♡ 待っ、……！！♡♡♡」

カリカリカリッ♡♡ こちょこちょっ、カリカリカリカリカリッ♡♡♡

「……お、っっ！！♡♡♡♡♡」

「こっちの乳首もフル勃起させてあげますね♡♡」

ぐぷ♡♡ ぐちゅっ♡♡ ぐちゅっぐちゅっぐちゅっ
ぐちゅっぐちゅっ♡♡♡

「お、お、お、っ、…ッ、お！♡♡♡」

「まんこも寂しいだろ？ 失恋したちんぽレスまんこ、
しっかり慰めてやらないとな♡♡♡」

カリカリッ！♡♡ ちゅくっ、ちゅくっ♡♡ カリカリカリッ♡♡♡ ちゅくちゅくちゅくちゅくっ！♡♡♡

「…おッ、おおおお、やめっ♡♡♡ イった、のに！♡♡」

ちゅちゅちゅちゅッ！♡♡♡ ぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっ！♡♡♡

「つづけるのやめてえ！！♡♡♡♡♡ ……ふっ、ン
お、お…！♡♡ おおおっ！！♡♡♡」

重ねられる快感に床板の上で手足をバタつかせる私に、
二人はさらに体重をかけてくる♡♡

動けない、逃げられない、この刺激を処理できない♡



絶頂させられ続ける未体験の快感♡♡♡♡♡♡

昂り続ける熱に私はパニックになった♡♡♡♡♡

「おッッ、ほおおおっっ！♡♡ ……っっ！！♡♡♡♡
やだっ、またイっちゃう、イ、ちゃう、からぁ！！♡
♡♡♡♡ おおおっ、おおおっ！！♡♡♡♡」

「まんこ締まってきたぞ、奥から指に吸い付いてくる♡
♡ このザラついたとこ、もっと擦ってやろうな♡♡
♡」

「乳首も乳輪までパンッパン♡♡ 顔もキマってきましたね♡♡♡ 付け根もっときゅって挟んじゃお♡♡」

カリカリカリッ！♡♡ ぢゅくぢゅくッ！♡♡♡ カ
リカリカリッ！♡♡♡ ぢゅくぢゅくッ！♡♡

ぢゅぢゅぢゅぢゅっっ！♡♡♡ ぐぢゅぢゅぢゅぢゅ
ぢゅぢゅぢゅ！！♡♡♡♡

「おッッッ、ほ、おおおお！！♡♡♡♡ またイクっ
！♡♡ イくの、や、……！！♡♡♡♡」

二人に潰されながら、それでものけぞった♡♡

喉が締まり呻き声が漏れる♡♡♡

頭の中が白んでいく♡♡♡♡♡

「や、あ、っっ、……………おほ、イク、い、く、……
……おおおおおおっっ！！！！♡♡♡♡♡♡♡」

自分でも初めて聞く、自分の声とは思えないくらい汚
い声♡♡

本気の絶頂をキメたんだと思い知らされる♡♡♡

「お姉さん、ほんとエッロイイき方しますね♡♡ オレ
もうちんぽ勃っちゃったんですけど♡♡♡」

「こんなにイキやすいザコまんこ、望み通り俺たちのち
んぽで面倒見てやらないとな♡♡♡♡」

二人がそう言いつつ何やらごそごそと音がした後♡♡
仰向けにくたばったまま動けない私の視界に、二人の
おちんぽが現れた♡♡♡♡♡

「うわ天城さんもちんぽバキバキじゃないですか！」
「年甲斐もなくこんなになっちまった、あんた、責任取
れよ？」

天城さんは私にその勃起を見せつけてくる♡♡♡♡
体格に似合う、太くてカリ高で、血管の脈打つ、たく
ましいちんぽだ♡♡

これが今から私のおまんこに入ってくるらしい♡♡♡
♡

……いいんだっけ？ 会ったばかりの人とこんなこと
するの♡
ほぼ外だし、相手は二人だし、やっぱりこんなの普通
じゃ——。

私に天城さんの影が落ちる♡♡♡♡
天城さんは私の足の間に体を押し込むと、私の首の後
ろを掬うように両手で支えた♡
肩が浮く♡♡ 天城さんのおちんぽがおまんこに入ろ
うとしているのが見えている♡♡♡♡♡

「……あ、だめ、です♡♡ こんなのだめ♡♡ たぶん、
」

「おら、入るぞ♡♡♡」

ぬ♡ ちゅ♡♡

充分に濡れた入り口を亀頭が押して♡♡ 開く♡♡♡
受け入れてしまう♡♡♡

ぬちゅ♡♡

くちゅ、ちゅ♡♡

ゆっくりと埋まっていく♡♡♡♡

太い亀頭、幹の形におまんこが広げられる♡♡♡

おちんぼが進んでくると同時に、私の体には下半身
から焦げるような熱が湧き上がった♡♡

「あ、ふ、っと…お♡♡♡ お、お…ほ♡♡♡ あ、ち、
ちがう、だめです、こんなセックス、だめ、」

「そうか？ あんたのまんこは喜んで吸い付いてきてる
ぞ♡♡♡」

「ちが、…♡♡ ほ……♡♡ お♡♡ お、おあ♡♡
おちんぼ♡♡ すご……♡♡♡」

「ああなるほど♡ ちんぽで振じ伏せられたいんだもん
な？」

体を登ってくるちんぽの熱に頭が焼かれる♡♡♡♡

首の後ろを覆う天城さんの手に頭を乗せるように仰向
くと♡♡

ばすっ！！♡♡♡♡♡

「お…………っっ！！♡♡♡♡♡」

天城さんはおまんこの奥におちんぽを押し込んだ♡♡
♡♡♡

ビリビリ、おまんこから頭のとっぺんまで電流が走り
抜ける♡♡♡♡

……ばすっ！♡♡

「おッ！♡♡」

一突き、

ばすっ！♡♡

「ッン！♡♡♡」

また一突きと♡♡♡

ばすっ！♡♡ ばすっ！♡♡

「オ、ッ、お！♡♡♡」

徐々に速度を上げた♡♡

ばすっ！♡♡ ばすっ！♡♡ ばすっ！♡♡

「おッ、おん、ンッ、ッ！♡♡♡」

力も増す♡♡♡♡

ばすっ！♡♡ ばすっ！♡♡ ばすっ！♡♡ ばすっ

！♡♡ ばすっ！♡♡ ばすっ！♡♡ ばすっ！♡♡

「おッッ、ンおおおッ！♡♡ ちんぽっ、すごい、……
っっ！！♡♡♡」

「どうだ、寂しいあんたのまんこは満足か？♡♡」

「だめ、なのに♡♡♡ こんな、……んおおおッッ
ッ！！♡♡♡♡♡」

「まんこはちんぽ引くたびに離さないって抱きしめてく
れてるぞ♡♡♡」

ばすッ！♡♡ ばすッ！♡♡ ばすッ！♡♡

大きな手にがっちりと首を支えられ♡

ばすッ！♡♡ ばすッ！♡♡ ばすッ！♡♡

逃げ場のない体に容赦なく突き込んでくるおちんぽ♡
♡

ばすッ！♡♡ ばすッ！♡♡ ばすッ！♡♡

自由に動かせるのに抵抗することすら忘れた手はだら
りと床板に伸び♡

ばすッ！♡♡ ばすッ！♡♡ ばすッ！♡♡

足はちんぽを深く欲しがるように横に広がる♡♡♡

「お、お、ほお～～……っっっ！♡♡♡♡♡ しゅ、ご
い♡♡ ちんぽ♡♡ しゅごい、よお！！♡♡♡♡♡」

「ちんぽだけでそんなシコい顔しちゃって～♡♡ かわ

いいですねえ♡♡♡」

私のだらしのない顔を太一さんが見下ろす♡♡
唇が降りてきて、私の下唇を啄むと、今度は顔の角度
を変えて唇に唇をぴったり押し当ててきた♡♡♡♡

「ん♡♡ ふ、う♡♡♡」
境界線がなくなった口内で舌が捕まる♡♡
そのままずりずり♡絡めるように舌を動かされ♡♡
「日記には、おまんこに一…、乳首もクリも全部一緒に
気持ちよくしてほしいって書いてありましたよね♡」
「……あ、……？♡♡♡」
そう言った太一さんの手が♡♡
脇から乳首を捕らえ、もう片方の手はクリトリスに爪
を当てる♡♡♡
「ちゃーんと叶えてあげますよ♡♡♡」
そして、また私の唇を塞ぐと♡

しこしこしこしこっっ！♡♡♡♡
乳首を付け根から先端まで細かに扱き、
ちゅこちゅこちゅこちゅこっっ！♡♡♡♡
膨らんで皮から覗いていたクリトリスの表面を爪で搔
いた♡♡

「ほオオオオっっっ！！！！♡♡♡♡♡♡」

「っあー……、すっげえ締まる…♡♡」

「体もガクガクですね、そんなにいいんだ、これ♡♡」

バスッ！♡♡ バスッ！♡♡ バスッ！♡♡ バスッ
！♡♡

天城さんが顔をしかめ腰のスイングが強くなった♡♡
♡

自分でも分かった、乳首とクリトリスへの鋭い刺激が
一瞬でその粒から下半身へ走り、お腹の下が縮こまった
のを♡♡♡♡♡

バスッ！！♡♡ バスッ！！♡♡ バスッ！！♡♡
バスッ！！♡♡

「おッ！♡♡ んむ、ッ！！♡♡♡♡ ……っ！！♡♡
♡♡♡」

「この、まんこの狭いところ……、ちんぼ挟じ込むの最
高だな…！♡♡♡♡♡」

しこしこしこおっ♡♡ しこしこッ♡♡♡ しこしこ
ッ♡♡♡ しこしこしこしこ…ッ♡♡♡

ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこ……！
♡♡♡♡

「……ッ♡♡ ～～～……！！♡♡♡ お、んーッッ
！♡♡♡♡」

「ほらぁ♡♡ ちんぽにばかり夢中になってないで♡
ちゃんとキスして♡♡♡♡」

私を追い詰めるようにひたすら一定のペースでピストンする天城さん♡♡♡♡

主張するように腫れた、敏感な乳首とクリトリスを刺激し続ける太一さん♡♡♡♡

私は口の中で懸命に太一さんの舌を追いかけてながら、おまんこが仕上がっていくのを感じた♡♡♡♡♡

「…………おッ♡♡ ほ、っ、お…！♡♡♡♡♡ おッお
ッおッ♡♡ イきます、イク…………！！♡♡♡♡♡」

広げた足を力ませて、お腹を沈めた♡♡♡♡♡
乳首とクリトリスから流れ込んだ快感がおまんこの奥
に溜まって♡♡ それをおちんぽが叩いて♡♡♡♡♡

「おツツツ、おおおおおおお！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

破裂した♡♡

頭も視界も真っ白だ♡♡♡♡♡

喉の奥から漏れ出る声が庭に響く♡♡

「まだだぞー♡♡♡♡」

「……、…………っ、な、」

天城さんがガクガクと痙攣したままの私の足を肩に担いだ♡♡

間髪入れず、浮いたおまんこに天城さんは腰を叩きつけてくる♡♡♡♡♡

ドチュドチュドチュドチュドチュドチュドチュ……！
！！♡♡♡♡♡♡♡

「…………ツツツ！！♡♡♡♡♡ んや、あツツツ、あああ！！♡♡♡♡♡」

今まで突いていたところとは違う場所♡♡
まっすぐ、硬いちんぽが膣壁を抉り奥を突いた♡♡♡
♡

ドチュドチュドチュツツ！！♡♡♡ ドチュドチュド
チュツツ！！♡♡♡

「あ、ああッ、あッ、あ、あ、ッ、らめ、」

「駄目じゃないだろ、まんこはしっかり感じてるくせに♡♡♡♡♡」

ドチュドチュドチュドチュドチュドチュツツツ！！！！

♡♡♡♡♡

「あ————～～～～～ッッッッ！！♡♡♡♡♡」

「あはは、あんた自身が追いつけないか？♡♡ 体はこんなに素直なのになあ？♡♡♡」

イって治まるはずだった熱が上塗りされていく♡♡♡
♡♡

奥がじんじんと疼き、さっきよりも自由なはずの体が快感に飲まれ、引き攣ったまま動かない♡♡♡♡

■続きは製品版にて♡